

# 「仕事を続けたい」をチームで叶える 症状の変化に寄り添う共創ケア

**複**数の視点が合わさると、1人では見えなかった部分が見え、高い視座からの全体像が見えてくる。サービス担当者会議は、この視座を得られる機会だ。パーキンソン病のA氏の担当者会議では、現状をそれぞれの視点から共有することで対応策が浮き彫りになり、本人の思いを共有するケアネットワークが形成されていた。

## Aさんのサービス担当者会議 レポート

### 本人の思いから始まる担当者会議 多職種の「前提」をつくる

20年間、パーキンソン病の闘病生活を送っているAさん。昨年8月から介護保険制度で7種8社のサービスを利用している（利用サービスは右下カコミ）。担当ケアマネジャー（以下、ケアマネ）の長谷川侑香さんは、Aさんの症状の変化に伴い、9月17日、サービス担当者会議（以下、担当者会議）を開催した。「今回の担当者会議の目的は、医療と介護の連携強化です。Aさんは症状の進行で毎日の体調の変化が大きくなってきました。Aさんの望む生活を送るには、服薬がカギになります。そのため、担当者が集まって現状を共有する必要があると感じ、開催を決めました。特に介護の専門職の意識を医療側に向けたいと思っていました」と、長谷川さん。

当日はAさんが利用する医療・介護サービスの担当者、総勢8名（ケアマネ含め）が参加。長谷川さんは事前にリ

アセスメントを実施したうえで、暫定ケアプランと要点をまとめ、参加者に配布した。要点は4点（P.9上図）。①②主治医・訪問薬剤師・訪問看護師から、治療方針や支援内容、Aさんの現状等の共有、③訪問介護から生活状況の報告、④福祉用具から利用状況の共有をすることで、主に服薬に関する対応策を検討していった。

「Aさんの意志が最優先（長谷川さん）」と、担当者会議はAさんの希望の共有からスタート。以下、発言の内容を重視するため、発言者を職種名で表記する。

**ケアマネ**「まずご本人の希望と意向、どのように生活をした  
いか、そして現在の日中の過ごし方をお話ください」

**Aさん**「パーキンソン病で、ここ数年、色々な動作が困難  
になってきて、ほとんど在宅で毎日を送っています。自分と  
しては、ある程度回復したら職場（大学准教授）に部分的

#### Aさんの基本情報

- ・61歳
- ・1人暮らし。（家族（妻、弟）は仕事の都合で遠方に居住）
- ・仕事：大学准教授（学生に向けた授業・指導、自身の研究）。現在はリモート勤務が中心
- ・趣味：クラシック音楽、読書
- ・病歴：パーキンソン病（2005年発症）、習慣性便秘（2006年発症）、過活動膀胱（2013年発症）。いずれも治療継続中
- ・介護保険の利用歴：2024年8月から利用開始
- ・認定情報：障害高齢者の日常生活自立度C1、認知症高齢者の日常生活自立度Ⅱb
- ・希望：仕事が生きがい。できる限り続けるために、自分の能力を維持したい

#### サービスの利用状況

- ・訪問診療
- ・訪問看護：週3日（月・水・金）。体調確認、内服管理、保清、食事のセッティング、環境整備等
- ・訪問リハビリ（訪問看護と同じ事業者）：週2回（火・木）。日常生活に必要な動作訓練、マンション内、屋外歩行訓練等
- ・訪問薬剤管理：処方薬のお届け、メモ書きや一包化の印字等
- ・訪問介護（2社）：毎日、朝・夕訪問。服薬、排せつ、清拭、環境整備、通院介助、買い物代行、食事準備、掃除、洗濯等
- ・夜間対応型訪問介護：夜間（18時～朝7時）の随時訪問
- ・福祉用具：電動ベッド、置き型手すり、四点杖をレンタル